

平成 26 年 6 月 24 日現在

機関番号：15101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531125

研究課題名(和文) 異文化間移行支援の基盤構築に関する研究

研究課題名(英文) A study of support systems for young people living among multiple cultures

研究代表者

児島 明 (KOJIMA, Akira)

鳥取大学・地域学部・准教授

研究者番号：90366956

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：本研究がめざしたのは、複数の文化間を移動する青少年の進路形成上の課題およびそれを克服するための諸条件を解明することであった。日本とブラジルの二つの文化間を生きるブラジル人青少年の進路形成を支える環境に注目した本研究からは、以下の二点があきらかになった。第一に、日本にあるブラジル人学校や通信教育は彼らのトランスナショナルな進路形成を支える重要な役割を果たしていること。第二に、ブラジル人学校は生徒の進路形成のみならず、そこで働く教師のキャリア形成をもささえる場になっていること。これらの知見は、トランスナショナルな世界を生きる当事者の視点に立った移行支援の必要性を示すものである。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine the actual circumstances and issues of transnational academic and career choices of Brazilian young people. The following two points became clear from this study. First, Brazilian schools in Japan and distance learning systems for Brazilian people play important roles in supporting their transnational academic and career choices. Second, Brazilian schools need to be understood as a place not only supporting a student's transition from school to work but career development of a teacher who works there. These findings show us that it is necessary to support academic and career choices of Brazilian young people on the basis of understanding how they live among multiple cultures.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：多文化教育 異文化間移行支援

### 1. 研究開始当初の背景

グローバル化の進行にともなう教育の課題という観点からすれば、以下の二点にかかわって精力的な研究がなされてきた。第一は、ニューカマーの子どもの教育をめぐる研究である。1990年の改正入管法の施行からすでに20年以上が経過した現在では、あつかわれる領域も多岐にわたるようになってきており、学校への適応、不登学・不登校、さらには高校進学や高校生活にいたるまで、ますますその裾野をひろげてきている。第二に、グローバル化にともなう社会の構造的変化の影響を受けて、青年期から成人期への移行の遅延や不明確化に多くの研究者の目がむけられるようになり、この領域での研究蓄積も膨大なものになりつつある。そこでは1990年代後半以降、将来展望を従来のようにはいだけなくなった若者の困難の背景が学校と職業との円滑な接続の破綻として描かれ、学校から仕事への移行の形式を再編成することの必要性が説かれている。

ニューカマーの教育研究の裾野のひろがり、日本社会で成長していくニューカマー青年の存在を反映するものであることを鑑みれば、それが上記の移行研究の視点を取り入れてもおかしくないし、逆に、移行研究においてニューカマー青年が考察の対象とされてもよいはずである。しかし残念なことにも、ともにグローバル化が進行する現代社会における若者の育ちを対象としているにもかかわらず、両者は互いに接点をもたぬままに、それぞれ別々の展開をみせてきた。

その背景として、すくなくともつぎの二点を指摘できるだろう。第一に移行研究における対象の限定性である。すなわち、多くの移行研究に共通しているのは、1990年代以降、日本社会に特異なメカニズムが急速に解体されていくなかで、それによってささえられてきた「青年期から成人期への移行に関する巧妙な日本的システム」も崩壊しつつあるという現状認識である。このような現状認識が

学校から仕事への移行に関する研究の蓄積をうながしてきた。しかしそこで議論の対象とされてきたのは、従来であれば「巧妙な日本的システム」の恩恵をこうむることができたはずの青年たちが直面している「危機」に関するものであり、そのようなシステムの恩恵から最初から除外されていた(いる)青年について多くを語るものではない。その意味で、ニューカマー青年は移行研究において、あらかじめ除外された存在であったといえる。

第二にニューカマー研究における移行への視点の欠如である。これについては、学齢期の子どもの学校への不適応や不登学といった深刻な問題への対処が早急にもとめられる現状にあっては無理のないところでもあろう。しかしながら、考察の対象が「児童・生徒」(しかも、ほとんどの場合は日本

の学校に通う「児童・生徒」)に限定されることによって、ニューカマー青年の経験を「児童・生徒」後もしくは「児童・生徒」外をも連続的に生きる移行のプロセスとして包括的に理解することが困難になってきたことも事実である。

ではなぜこのような問題が生じるのか。ここでわれわれは、両者に通底する認識枠組みの限界について考えないわけにはいかない。その認識枠組みとは、端的にいえば、移動を例外視するまなざしである。移行研究においてニューカマー青年が対象外とされてきたのは、国籍のちがいに加え、移行は一国内においてなされるものであるという前提が暗黙の了解事項とされてきたからである。また、ニューカマー研究において、教育支援といえは「児童・生徒」への日本語指導や適応指導が主要な関心事であったのは、日本国内での進路形成を前提としてきたからにほかならない。いずれの研究においても、移動する存在は定住者を前提とする社会において例外的であるとする認識を背景に議論が組み立てられてきた。

だが、ニューカマーに限らずますます多くの若者が反復性を有する越境移動のなかで青年期をすごしていく現実、グローバル化が進行する現代日本社会において、国境を越えた移動やそうした越境移動をおこなう人びとの存在を無視して青年の移行を論じるわけにはいかないことをわれわれに突きつけている。移動の視点を含んだ移行支援の構想は、一国内での定住を暗黙の前提として展開されてきた教育研究の枠組みそのものの問い直しにもつながるものと考えられる。

### 2. 研究の目的

本研究がめざしたのは、複数の文化間を移動する青少年の進路形成上の課題およびそれを克服するための諸条件をあきらかにすることであった。具体的には、とくに以下の二つの課題を解明することを目的として調査研究をすすめてきた。

(1) 複数の文化間を移動する青少年の移行過程をささえる教育機関やそこでの業務に従事する人びとの実態を把握すること。

(2) 複数の文化間を移動する青少年の移行の経験について当事者の視点から理解し、実効的な支援のあり方について検討すること。

いずれの課題についても、現代日本社会とかわかって複数の文化間を移動しながら進路形成をおこなう典型的な存在としてブラジル人青少年を対象にすえた。そして、ブラジル人青少年とかれらの移行過程をさまざまなかたちでささえる諸機関や人びとの関係に注目しながら調査研究をおこなった。

### 3. 研究の方法

上記(1)の課題については、平成23年11月以降、ほぼ1ヶ月に1回の割合で愛知県名古屋市に所在するブラジル人学校(以下、A

校)を訪問し、フィールドワークを継続してきた。平成26年3月までの訪問回数は22回におよぶ。ブラジル人学校が青少年の進路形成をどのようなかたちでささえているのかについてできるかぎり多角的に理解するため、日常的な教育活動についての観察をおこなうと同時に、校長、教師、保護者、生徒、地域住民へのインタビューをかさねた。とりわけ、一人ひとりの生活史を丁寧に聴きとる作業を通じて、ブラジル人学校がかれらにとってもつ意味について当事者の視点に立った理解ができるようにつとめた。また、調査対象としたA校が全日制の教育課程とは別に開講している、学齢期をすぎた在日ブラジル人対象の通信教育(中高レベル)にも注目し、その利用の実態と受講者にとっての意義についても観察とインタビューによる調査を実施した。

(2)の課題については、日本とブラジルの間を行き来する青少年の移行過程をめぐる語りにもとづき、当事者の視点に立った移行支援の可能性をさぐった。使用したデータ自体は過去のプロジェクトにおいて収集したものであるが、当事者の視点からの移行過程の理解および移行支援の可能性という本研究の目的に即した観点からの再分析をおこなっている。第一には、平成21年12月にブラジルで実施した日本へのデカセギ経験を有する日系ブラジル人青年へのインタビュー調査をもとに、デカセギ経験が各個人の自己構築の過程や人生経歴の築かれ方にかかわるバリエーションを生みだしていくかをさぐった。第二には、平成16年10月から平成18年12月にかけて東海地方で実施したブラジル人青年へのインタビュー調査から得られた知見を手がかりとしながら、移行過程を生きる当事者の視点に立った支援の可能性をさぐった。

#### 4. 研究成果

(1) A校では、生徒がこれまでどのような道をたどってきたのかを丁寧に把握することが重視され、そのうえで一人ひとりの経歴に沿った教育が模索されてきた。多様な経歴や多方向的な進路選択に対応しようとするA校の教育観は、現代社会における青年期の移行をめぐる諸課題との接合点を多く有するものである。それが日本の教育システムであれブラジルの教育システムであれ、一般的とされる移行過程からなんらかの理由で逸れることにより学習の機会を奪われたり、学歴上の空白が生じてしまった人びとに対して学び直しの機会を提供し、また、進路形成が複数の国家間移動をともしないながら進行する可能性をつねに織りこみながら教育活動を展開するA校は、「断片化した複数の移行過程」を調整し、調和させていく過程を個人の経歴や展望に即してささえていこうとしているといえる。越境行為により不連続な複数の世界を生きるブラジル人青少年の移

行過程をめぐる諸課題は、まさしく現代社会を生きる私たちの課題にほかならない。このような課題に不安定な状況にありながらも正面から向き合おうとしているのがブラジル人学校であることを、私たちは深く認識する必要がある。

ブラジル人学校をめぐることは、各種学校認可にせよ大学入学資格認可にせよ、あるいは「虹の架け橋教室」事業にせよ、ブラジル人学校ないしブラジル人を既存の教育システムにいかにか組み込むかという視点からの施策が熱心に進められてきた。日本の学校との接続の円滑化や経営上の困難を抱えるブラジル人学校への財政支援などが社会や現場からの要請に応えるかたちで推進されてきたものであることを鑑みれば、そのような施策や支援をいっそう充実させていくことの重要性はあきらかである。ただ、その一方で、ブラジル人学校が制度的、財政的にさまざまな支援を必要とする存在であることだけが過度に強調されることには注意が必要だろう。そのようなまなざしは、一歩まちがえば、ブラジル人学校を終始、支えられる客体としての位置に固定化してしまうことで、それが有する行為者としての能動性やその価値を奪ってしまいかねないからである。

教育機関としてのブラジル人学校の日常的な実践に目を向ければ、それが、グローバル化が進行する社会において必然的に生じる教育上の諸課題に真摯に向き合おうとするものであることがあきらかになる。言語や文化の境界を越えて生きる青少年の学びや進路形成をいかにささえるかといった諸課題への対応をめぐる模索を続けるブラジル人学校の姿は、そうした諸課題に正面から向き合えないまま既存のシステムに固執しがちな日本の教育界の硬直性を逆にあぶりだしもする。言い換えれば、人びとの多様な生き方に対応できるものへと日本の教育システムそのものを組み替えていくことの必要性に気づかせてくれるかけがえのない存在としてブラジル人学校を位置づけることもできるのである。

(2) 来日後の一定期間、工場での単純労働を中心とするデカセギ労働者として生活した経験を有する人びとにとって、ブラジル人学校に教師の職を得ることは、そうした生活からより望ましい生活へ移行することを意味していた。すなわち、ブラジル人学校は軌道修正の場として機能したといえる。ただし、軌道修正には教師にもどるタイプと教師になるタイプの二通りが存在した。前者はブラジルでの教師経験を有するがゆえに、ブラジル人学校の教師になることは自分の本来の職業にもどることと考える。それに対して後者は、ブラジル人学校に教師の職を得ることで、はじめて「教師になる」。かれらは参照すべき過去の教師経験をもたないぶん、デカセギ労働者としての自らの経験を

深く見つめ、それを生徒や保護者の経験とも照らし合わせながら、望ましい教師像を模索していく。ブラジル人学校で学ぶ生徒の背景はブラジル本国の学校に通う生徒のそれと根本的に異なることを鑑みれば、過去の教師経験を欠くことは、ブラジル人学校で教師をしていくうえで、かならずしも不利な条件とはいえないのかもしれない。そしてこのことは、もうひとつの問いに深く関連してくる。

それは、デカセギ労働者としての教師自身の経験は教師の仕事にどのように織り込まれるのか、というものである。この点については、教師にもどるタイプの軌道修正と教師になるタイプの軌道修正のあいだで若干のちがいがみられた。前者の場合、デカセギ労働者としての自己を、本来あるべき姿からの逸脱として、教師としての自己から認識のうえで切り離すことが可能である。だが後者の場合、そのような切り離しはできないため、デカセギ労働者としての自己についての省察を手がかりとしながら教師としての自己の望ましいあり方を模索せざるをえない。だが、そのようにデカセギ労働者としての自己と対話しながら教師としての自己像を模索する過程にこそ、ブラジル人学校に固有の教育観や教育実践を生みだす萌芽があるのだともいえる。社会との関係をふまえた生徒理解、学ぶたのしさの伝達、学びと社会との関連づけ、学びを通じたエンパワーメント。いずれも、デカセギ労働者としての生活のなかでそれぞれが抱えた課題に応じて模索されてきた生徒理解および教育実践であり、今後の展開が期待される。

これに加えて興味深いのは、教師にもどるタイプの軌道修正であれ教師になるタイプの軌道修正であれ、教師自身にとってブラジル人学校がさまざまなかたちでの資源獲得の場となっていることである。大学卒業資格や教員免許の取得をはじめ、知識や能力の向上を目指して学び続ける教師を、ブラジル人学校は実質的にささえる役割を果たしている。すなわち、教師たちにとってブラジル人学校は、ひろい意味での生涯学習の場、少なくともそれをささえる場としても機能しているのである。そして、このことが、既存のブラジル人学校を越えた諸活動へと教師の仕事の可能性をひろげてみいる。

以上の点を考慮に入れば、ブラジル人学校は教師にとって軌道修正の場であるだけでなく、新たな軌道の形成を支える場としても機能しているものと考えられる。言い換えれば、教師が、教えることと学ぶことの柔軟な組み合わせのなかで自らのキャリアを模索できるような環境の一部として、ブラジル人学校は存在しているのである。

(3) 学齢期を過ぎた在日ブラジル人がブラジルの教育内容をポルトガル語で学び、中高レベルの卒業資格を取得する手段として通信教育がある。A校が実施する通信教育の現

状をふまえ、その意義と課題をまとめると以下ようになる。

第一に、学齢期を過ぎてすでに働いている人びとにとって、時間的な拘束なしに学べる通信教育は生活の現実に適合的な学歴取得の手段であるといえるだろう。これによって、十分な学歴をもたぬままに就労中心の生活を送ってきた人びとが、帰国後の就学・就職を考えた場合の学歴上の不利益を軽減できることの意義はいうまでもない。ただし、通信教育では学習時間の確保が受講生自身の自己管理能力と意志次第であることも事実であり、学習の継続はけっして容易なことではない。

第二に、通信教育は不足した学歴を埋め合わせるための手段であるにとどまらず、在日ブラジル人青年の多様かつ多方向的な進路形成をささえる役割をはたしてもいる。仕事と学びが複雑に入り組むかたちで人生経歴が築かれたり、複数の国境をまたぐかたちで進路形成がなされたりすることが例外ではない現状にあって、どこにいても、どのタイミングでもブラジルの教育を受け卒業資格を取得できる通信教育は、もはや不可欠な進路保障の手段ともいえよう。

第三に、通信教育は学齢期を過ぎたすべての年齢層にひらかれており、実際に子どもをもつ30代や40代の受講生もすくなくないことを鑑みれば、保護者のエンパワーメントという側面も無視することはできない。それは、保護者が教育を通じて自らのキャリア・アップをはかることで、社会経済的な不利が次世代に継承されるという「負の連鎖」をくいとめることへの期待であると同時に、社会変革への期待でもある。A校の校長が「社会意識」の醸成という観点から通信教育の可能性を語るのには、そのような意識を身につけた保護者の連帯が生まれてはじめて、子どもたちの教育環境の改善は具体的なかたちをとってすすむと考えるからである。

第四に、通信教育と平行して実施される対面指導や試験を受けるために来校するという行為自体に大きな意味がある。端的にいえば、そこでは教育を介して人びとの交流が生まれ、それまでには存在しなかったあらたな関係性が芽生え、資源として蓄積されていくのである。対面指導や試験の合間にスタッフや他の受講生との間で交わされる会話では、学業、進路、子育て、家族関係、恋愛、仕事など、人生におけるありとあらゆる事柄が話題に含まれる。さまざまな視点が提示され、ときには貴重なアドバイスや手助けをもらえることもある。「社会意識」の醸成や人びとの連帯の基礎となるのは、こうした日常的な相互行為の蓄積にこそあるのではないだろうか。通信教育に付随するこうした対面的な相互行為をけっして無視するわけにはいくまい。

(4) デカセギ経験を有する日系ブラジル人

青年の移行過程は、「2つの時間」(海外就労の経験蓄積とライフコースの推移)の交差の仕方および交差場面における各個人の選択のありようによってさまざまなバリエーションを生み出すことがあきらかになった。このことは、現代社会において海外就労経験をともないながら人生経歴を築いていく若者の移行過程を理解するにあたって、すくなくともつぎの2点を考慮に入れることの必要性を示唆するものである。ひとつは海外就労経験における時間的変化、もうひとつは移行過程における空間的移動である。これらはいずれも移行過程の「断片化」や「複数化」に密接に関連する要因であることからすれば、海外就労経験をともなう若者の移行過程には、グローバル化と個人化を前提とする現代社会における自己構築や人生経歴の模索にとっての課題が、ある意味、凝縮されているとも考えられる。

そこでの主要な課題は、「断片化した複数の時間/空間」をいかに調整していくかということになるだろう。調整は、具体的には帰属をめぐる複数の選択肢からの個人の選択としてなされる。デカセギ労働者として一般には表象され、経済的動機のみによって説明されがちな若者たちにおいても、帰属をめぐる選択肢は職業に限定されるものではなかったし、また、特定のエスニシティに限定されるわけでもない。仮にエスニシティへの帰属が強調される場合でも、それは空間的移動や時間的変化のなかで可変性を有するものであった。また、グローバル化と個人化を特徴とする社会を生きる若者にとって「自己」像の構築が現代の消費文化と分かちがたく結びついていることを鑑みれば、消費文化に関連した選択肢にも今後いっそう目を向ける必要があるだろう。

もっとも、帰属をめぐる複数の選択肢のなかからの選択を通じて自己が構築されることは、経済的な問題からの解放を意味するわけではない。むしろ、労働者以外の社会的カテゴリーを用いての自己定義が盛んになされることによって、デカセギ現象に付随する明らかな階層や格差構造が見えにくくなり、結果として「雇用調整のためのフレキシブルな緩衝要員」という不安定な立場を追認するという事態も十分に生じうる。こうした点を考慮すれば、「2つの時間」の調整に関して、すべてを個人の選択や責任に帰してしまうのではなく、調整困難に陥る諸要因についての冷静な把握が必要となるだろう。たとえば、海外就労の経験蓄積が、職業移動をともなうキャリア形成につながるものでなかったり、帰国後には一切無効とされてしまうといった事態が、個人の選択肢そのものを狭め、人生経歴を築く際の大きな障壁となっているのだとすれば、そのような不利な状況を少しでも軽減するための措置が必要となるはずである。

(5) 在日ブラジル人青年の学校からの離脱は、なによりも移動の経験と密接なかわりがある。移動といえば国家間移動のみが意識されがちだが、実際には来日後も地域間移動や帰国/再来日が頻繁にくりかえされることが多く、学校からの離脱の経験は、むしろ来日後の頻繁な移動のなかで生じる傾向にある。

また、学校での経験及びそれに対してなされる学校側の対応のあり方も、在日ブラジル人青年の学校からの離脱に大きく作用する。学校からの離脱をひきとめる環境の乏しさだけでなく、不登校対策や進路相談といった生徒の学びの可能性を保障するための実践も、それが当事者の背景に対する理解を欠いたままでおこなわれた場合、逆に学校からの離脱の促進という意図せざる結果を生みだしてしまいかねない現実をも直視する必要がある。

学校からの離脱を余儀なくされたブラジル人青年たちは早期就労および過剰な消費行動によりかれらなりの「自立」を達成しようとするのだが、かれらが自力で構築する自立のコンテキストは、それを追求すること自体が自立とはほど遠い不安定な状態に生きることをかれらに強いることになりかねないというジレンマを抱え込んでしまう。これについては、一つには、物語の生成が終始個人レベルでなされたものであったこと、二つには、市場のほかに自立のコンテキストを形成するための資源をもちえなかったことが関係していると考えられる。

しかし、このようなあり方だけが自立のコンテキストの形成のあり方ではないはずである。くりかえされる地理的移動により学校からの離脱を余儀なくされる局面に何度も立たされながらも、不利な条件の累積という悪循環に陥ることなく軌道を修正しえたある少女の事例から浮かびあがるのは、自立を個人的な問題解決の物語へと回収してしまうのではなく、むしろ、そのような物語を相対化する視点が豊かに提供されることの重要性であった。

では、自立のコンテキストの共同構築を中心にすえた移行支援の可能性を、われわれはどのように考えることができるだろうか。ひとつの可能性として、支援対象となる子どもたちと同じライフ・ステージにおいて渡日した経験をもつ支援者が、かれらと「当事者性」を共振させながら自らの経験と現在の活動の意義を再構成していく過程を考えることができる。これは、子どもの自立のコンテキストが、支援者自身の自立のコンテキストとわかちがたく結びつきながら、まさに「かわり」のなかで構築されていく過程でもある。

ただし、共振するということは、その場に居合わせる者による同一のコンテキストの共有を意味するわけではない。むしろ、共振によって浮かびあがるのは、たがいに異なった自立のコンテキストを生きてきたという

現実に対応する多様な当事者性のせめぎあいである。では、こうした当事者性のちがいを引き受けたうえで、なおかつ共同で自立のコンテクストを構築していくとはどういうことなのだろうか。外国人の子どもたちによる自治的運営組織の活動を通してみえてくるのは、それぞれの「ルーツ」に配慮しながらも、子どもたちの経験をそこへ閉じ込めてしまうのではなく、かれらがそれぞれに固有の「ルート」を生きていることを認めたとうえで、自立のコンテクストの構築に有効な資源を見極め、必要な「かかわり」を生みだしていくことの重要性であった。

自立のコンテクストの再構築を現実の下支えするための制度的基盤を築くことも必要である。日本で暮らすブラジル人青年に限定してみても、日本の学校に通い続ける者、長期間ブラジル人学校に通っているが実態としては日本に住み続けている者、早期に学校を離脱してしまい働いている者、不就学者、一度は帰国したが再度日本で暮らすことになった者など、就学をめぐる実態はますます多様化している。それはまた、学び直しを必要とする者がますます増えていくということでもある。自立のコンテクストを再構築しようとする試みが実質的な自立に結びつくためには、このようなやり直しのきく教育システムが、ニューカマー青年たちの移行過程の保障も視野に入れたかたちで構想される必要があるだろう。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計5件)

児島 明、ブラジル人学校の教師であること、地域学論集(鳥取大学地域学部紀要) 査読無、第10巻、第2号、2013、pp.45-61  
<http://repository.lib.tottori-u.ac.jp/Repository/metadata/4629>

児島 明、教育機関としてのブラジル人学校、教育と社会 研究、査読無、第23号、2013、pp.93-101

児島 明、ニューカマー青年の視点に立った移行支援の可能性 在日ブラジル人青年の「自立」への模索を手がかりに、異文化間教育、査読有、37号、2013、pp.32-46

児島 明、国際結婚と日本語継承、教育、査読無、No.807、2013、pp.116-117

児島 明、海外就労と自己構築、地域学論集(鳥取大学地域学部紀要) 査読無、第8巻、第2号、2011、pp.47-63

<http://repository.lib.tottori-u.ac.jp/Repository/metadata/3108>

### 〔学会発表〕(計3件)

児島 明、ブラジル人学校の教師であること、日本教育社会学会第65回大会、2013年9月21日、埼玉大学

児島 明、見えないトランジション 在日ブラジル人青年にみる「自立」の行方、

異文化間教育学会第33回大会、2013年6月9日、立命館アジア太平洋大学

児島 明、デカセギと青年期、日本教育社会学会第63回大会、2011年9月24日、お茶の水女子大学

### 〔図書〕(計0件)

### 〔産業財産権〕 出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

### 取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

### 〔その他〕 ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

児島 明 (KOJIMA, Akira)  
鳥取大学・地域学部・准教授  
研究者番号：90366956

### (2)研究分担者

( )

研究者番号：

### (3)連携研究者

( )

研究者番号：